

紀行

新島襄が寄港した村

—同志社と風間浦村交流15周年
に寄せて—

河野仁昭
(元社史資料室長)



風間浦村 (かざまうらむら)

本州最北端に位置し、人口2,750人(2006年3月現在)。1889(明治22)年町村制の施行により下風呂(しもぶろ)、易国間(いこくま)、蛇浦(へびうら)の旧3村が合併、それぞれ1文字ずつを取って風間浦村となった(青森県下北郡)。1864(元治元)年4月18日、新島襄が「快風丸」で函館に向かう途中、下風呂港に寄港し20日まで滞在した。

外国人留学生とともに

この本州最北端の風間浦村を訪れるのは、ほぼ10年ぶりである。

昨年(2006年)でこの村と同志社が交流するようになって15年になった。9月19日にその記念式(学校法人同志社・風間浦村交流事業15周年記念式典)

が村で行われ、同志社からは大谷實総長が出席した。

わたしは「同志社時報」から、現地を訪ねて来て何か書くよう願ってもない依頼を受けた。11月下旬であった。

『風間浦村勢要覧—2004年』に載っている村の「年表」に、1992(平成4)年2月25、27日「同志社大学留学生来村、村内小中学生と交流が始まる」

二人とも総会に招かれていたのである。わたしは日本国内をあまり旅行することがなさそうな留学生たちのために、いい機会だと思った。旅費は村が持つてくれるのだ。国際課に理由を説明して参加者を募ってもらった。村口さんから4、5名といわれていたので、男女合わせて5名にした。

村には小学校が4校あった。村の意向で留学生は2組に分かれ、2校ずつまわることにしたのだが、どの学校でも熱烈的な歓迎を受けた。子供たちが留学生になじむのは早かった。一緒にゲームをしたり豆まきや餅つきなどをして、予定の1時間半はあっという間に過ぎた。別れぎわに子供たちは「また来てね」と泣き出しさんばかりに絶叫した。

留学生たちにとっては来日して初めての、心を開いて接し合える日本人との出会いだっただろう。

「新島襄先生寄港の地」碑

母校から遠く関わりあいがほとんどない青森に、新島を記念する碑を建ててほ

しいという要請が同地の校友会支部からもたらされたのは、わたしが村口助役に会った前年、1990(平成2)年であった。わたしは同志社本部から、支部の役員に会って来てほしいという依頼を受けた。記憶に誤りがなければその年の夏であった。

田辺キャンパスを開学したばかりの同志社財政の現状については、おぼろげながらわたしも承知している。用件は説明を受けるまでもないことだった。

青森へ着いたわたしはまず、新島が寄港した村へ連れて行ってもらうことにした。碑を建てるにはその場所の確保が必要だし、交通の便の問題もある。同志社関係者に訪ねてもらえないようではあまり意味がない。

卒業生のHさんが車を運転して下さった。片道3時間、「遠いですね」と、わたしは何度か言った。着いた所は公民館で、その中に教育委員会の事務局があった。Hさんは昨日電話で連絡しておいて下さったようで、村の人が4、5名応接室で待つて下さっていた。

わたしは鞆に入れてきた新島の「函館

とある。路面がバリバリに凍てついていたことを思い出す。

村の子供たちは外国人にあまり接する機会がないのだが、一度留学生を連れて来てもらえないだろうか、当時村の助役だった村口愷さんに頼まれたのは、その前年の秋だったと思う。青森県校友・同窓会支部総会のあとであった。企画財政課長の越膳泰彦さんが一緒だった。お

「紀行」と、新島が函館到着直後に江戸の父親に出した手紙の、この村のことが書かれている部分のコピーを人々に配って、新島と同志社について、小一時間しゃべったと思う。当時としては非常に珍しかったという洋式帆船がこの村に来たことを記念する碑をお建てになられてはいかがですかと、最後に付け加えた。



海峡いさりび公園に建つ「新島襄先生寄港の地」碑

反応は皆無であった。しかし、新島の名も同志社についても初耳のようだったにしては、黙って熱心に聞いてくださっ

ただけで十分ありがたかった。

帰りに、下風呂のいさりび公園にぼんと建っている井上靖の詩碑を見た。この村へ来ることはもうないだろうと、わたしは思った。

再びわたしが青森を訪れたのは、それから1年ほどのち、1991年の支部総会に出るためだった。先に書いたように、わたしはそこで村口助役に出会い、留学生のことで依頼を受けた。青森支部はその前年から村と折衝をつづけてきたに違いなかった。そうでなければ村口さんや越膳さんが招かれていたはずがない。

いさりび公園の高台に建った「新島襄先生寄港の地」碑の除幕式が行われたのは、1992年10月22日であった。すべて村の手になるものである。わたしは瓢箪から出た駒を眺めるような思いで、新しい壮麗な碑に向き合っていた。

風間浦中学生の来訪

村役場から、村の人たちに新島襄や同志社について話をするよう求められたのは、留学生たちと2度目に村を訪れた1

同志社にとつても初めてのことであったから、受け入れ態勢はほとんど何もできていなかった。わたしは先ず田辺キャンパスへ案内して新しい同志社大学を見てもらい、学生食堂で昼食を共にした。

それから国際高校で土山登校長に会ってもらって、今出川キャンパスへ帰って同志社中学校を訪れた。すでに放課後だったと記憶しているのだが、同中生と挨拶を交わしあつたりしたと思う。そのとき挨拶をした風間浦中学の代表は、わたしに留学生たちと泊まるかが旅館のご子息であった。

翌年からは両中学校間で連絡を取り合つて実施されることになった。1995年から同志社中学の生徒代表たちも年に一度、風間浦中学校を訪れるようになっていた。いい体験をしてきているであらうと思つてゐる。

村と新島精神

「交流事業は続けたいと思つています」。今回、村を訪ねてお会いできた川嶋隆風風間浦中学校長はそう言われた。「子供た

993年2月だったと思う。当時の村長であつた小野愼一さんをはじめ行政の首脳は、碑のことや同志社のことなどについて、より多くの村人に知ってもらいたかつたのかも知れない。会場は公民館の2階大広間だった。わたしは新島の「函館紀行」と「同志社大学設立の旨意」を紹介した。

その日の夕刻、公民館の1階で、村が留学生歓迎の立食パーティーを開いて下さつた。留学生たちは、初めて目にする村の料理とその食べ方を周りの人たちが教えられていた。

そのパーティーの場で、漁師かと思われ一人の日焼けした初老の人が歩み寄つて来て、あなたは今朝の話の中で、西へ向かつて進んでいた船が、東からの激しい潮流で進めなくなったのはなぜか分からないと言つたが、いまだって小型の漁船なら同じことだという意味のことを言つた。「函館紀行」に「東方より来れる潮水の勢強くして箱桶さして行き難し」と書いてある。「なぜですか」と尋ねたら、「楫（かじ）がきかなくなるんだ」と言われた。なるほどと思つた。

ちも親たちも楽しみにしている事業ですから。

ただ、村に財政的な負担をかけることや、授業実施の関係では問題もあるのだが、と付け加えられた。さらに、少子化が深刻な状態になつてきている。

今春（2007年）小学校へ入学する子供は、村全体で僅かに10名だというのが（現在の生徒総数142名）。6年後の中学1年生は10名ということになる。昨年同志社中学校を訪れた2年生は21名であつた（全校生徒数79名）。この数はここ何年かは横這いだが、生徒数の激減は教育現場だけの問題ではなくなる、それが目に見えていると言われると、黙つてうなづくしかない。

わたしが留学生たちと訪れていたころ最も小規模だった桑畑小学校は、2001年3月に閉校になつてた。その跡地が今、村人の保養所になつてゐる。わたしは運動場の端の小さな谷間に湯が吹き出しているのを、生徒の案内で見たことがある。保養所はその湯を利用してゐた。受付の女性に同志社から来た者ですがと言つたら「わたしの子供も同志社へ行

快風丸は下風呂から函館まで十何時間かかっている。帆船は一度日本海へ出て、西風を待つて函館港へ向かう、だからそれだけ時間がかかることもあると、やはりその人に教えられた。目からウロコが落ちる思いであつた。

村の中学2年生が全員、同志社を訪れてくれたのは、そんなパーティーから1ヵ月後の1993年3月上旬である。留学生たちと村を訪ねていた時その計画を知らされたわたしは、修学旅行ですかと小野前村長に尋ねた。そうではなかつた。文部省（現・文部科学省）の規程で修学旅行は東京が距離の限界だという。

新島先生が創られた同志社に触れる機会を生徒たちに与えてやれば、きつというる学ぶところがあるはずだ。京都という古い都も見せてやりたい。そういう体験をすれば、豊かな自然とか村の良さも分かつてくれるようになるだろう。「村にとつていま一番大事なことは、子供を育てることです。将来どこで生活することになるにせよ、自分の故郷に誇りを持つ大人になつてほしいのです」。小野村長はそう言われた。



村口佳菜子さん母娘（村口産業の喫茶室で）

「つたんです」と言われて驚いた。とてもよかつた大喜びでした、と告げられて嬉しくなつた。

その隣に立つていた作業員らしい男性も「わたしの孫は、今年同志社へ寄せてもらいました」と、にこにこ顔であつた。親たちも喜んでいと校長が言われたとおりである。

村役場がある易国集落に、村口産業という木工所がある。新島記念碑の建立に中心的な働きをされた村口さんはその一族で、助役に就任されるまでこの製材部門の責任者であつた。帰路につく予定時間に少し間があるので寄つてみるこ